

この連続講演会の共通テーマとして「アメリカのユニラテラリズム（単独行動主義）」と書いてありますが、市上言うところのアメリカのユニラテラリズムとか単独行動主義というのはどういうことか。つまりこれは、暖かいとか寒いとか、汚いとか美しいとか、そういうアメリカのある種の現象、状況を言っている表現なのか。それとも、アメリカの政策がそういう政策であると言っているのか。それとも、アメリカの行動のパターン、アメリカの行動の仕方の話をしているのか。それとも、アメリカの思想、考えを言っているのか。アメリカのユニラテラリズムと言った時に、アメリカの現象を言っているのか、アメリカの政策を言っているのか、アメリカの行動様式を言っているのか、アメリカの思想を言っているのか。まず、その定義をしておかないと話がこんがらがりますので、やや大学の講義みたいになりますけれども、ちょっと整理しておきたいと思います。

ユニラテラリズムというと、イズムは主義という意味ですから、主義・主張あるいは態度全体を示しているように響きますが、私はこのユニラテラリズムには、政治的、経済的、文化的、この3つあると思っています。

アメリカの政治的ユニラテラリズムというのはイラク紛争だけではございませんで、例えば国際連合・安全保障理事会で拒否権がありますが、最近どこの国が何に「ノー」を言ったか調べてみますと、圧倒的に多いのはアメリカです。過去10年ぐらいとっても、中国が台湾問題に関連して1回やりましたし、ロシアも1~2回やりましたけれども、アメリカは非常に多くて、そのほとんどはイスラエルあるいは中東和平に関連することです。この veto、拒否権を発動するということは、「他の国はみんなそれがいいと言っても、俺は反対だ」というわけですから、まさにユニラテラリズム、単独行動主義だと考えていいのではないかと思います。

さらに例を申し上げますと、世界の人道、世界人類全体に対する犯罪とか、広い意味での人類社会全体、人間の安全保障全体に関連するようなことについての

犯罪を裁く国際刑事裁判所条約を作ろうとしたら、アメリカはそれに入らない。これはアメリカの軍事基地が世界中にありますので、そういうこととも関連しています。それから、いままた入りましたけれども、国際機関のユネスコから脱退しましたね。万博も、2005年に日本で愛知万博がありますけれども、アメリカは万博条約から脱退しましたから参加しないでしょう。何らかの形で参加する道は残されているかもしれませんが、万博のメンバーとしては参加できないわけです。万博から脱退したり、国際機関から脱退したりしている、これも一種のユニラテラリズムです。

では、経済的なユニラテラリズムとは何か。例えば、遺伝子組み換えという問題がございます。大豆などの遺伝子組み換え作物の輸出について、国際的な規制をするのは反対だというのがアメリカの立場です。ヨーロッパは、「遺伝子組み換え作物は安全性に問題があるのではないか。だから、安全性が確認されない限りは輸出してはいけません」という国際条約にしようと言っています。ところがアメリカは、「輸出は自由であるべきだ。ただ、これは危険だということになったら、輸出を止めましょう」と言っている。「一応自由にしておいて、しかし危ないということが分かったら止めましょう」という考え方と、「安全性が確認されたら出しましょう」という考え方と、これは同じように響きますが、実際は非常に違いますね。ヨーロッパは一生懸命安全性を確認してからと言っているのに、アメリカは自由に出していいじゃないかと言っている。ヨーロッパから見ると、遺伝子組み換え作物の扱いはアメリカは一方的だということになります。

もう1つは、sanction、制裁の問題です。例えば、牛肉ホルモンの問題とかいろいろな問題で、アメリカは自分の国内の法律なり考えに違うものに対してはすぐ制裁をかける。あるいは、ダンピングもそれと似ていますけれども、安いものが入ってくると制裁をかける。しかもこれは、国際ルールに基づいた制裁というよりは、アメリカの一方的な制裁でありまして、ヨーロッパとアメリカの間でしょっちゅう問題になります。

この制裁がなぜヨーロッパから見ると経済的な思想・考え方の面でアメリカの単独行動主義ということになるかと申しますと、安売りがいけないとか著作権違反じゃないとかかいう時に、国際的なところに持ち出せばいいわけです。例えば、世界貿易機構とか、いろいろなところがありますので、そこに持ち出して、「国際的なルールに違反したからいけないじゃないですか」と言えばいいんですけども、アメリカの場合は、アメリカの国内法とかアメリカの考え方とかアメリカの制度に照らして、それに反するものはけしからんと言って制裁をかけるものですから、他の国から見ると、これは国際ルールにのっとっているのかどうか、よく分からないじゃないかという話になる。普通、単独行動主義という時は、どちらかと言うと政治的なものを指す場合が多くて、ダンピングとか経済的な意味でのアメリカのユニラテラリズムというのは、あまりユニラテラリズムとか単独行動主義とは言われないうんですけども、考え方からしますと、単独行動主義の思想がアメリカの経済政策なり貿易政策の中かなり入っているとヨーロッパの方は見ているということです。

第3の文化的なユニラテラリズムは何かと言いますと、文化的な単独行動主義というのも変なんですけど、まず英語を世界中に広めて英語しか使わないということとか、アメリカの音楽とか映画とか服装とかいう問題です。

ヨーロッパの人たちからすれば、英語しか使わない。男も女もジーンズをはいて、マクドナルド・ハンバーガーを食べている。みんなロックミュージックを聴いて、インターネットで何かやっている—そういう現象は文化的な意味でアメリカのユニラテラリズムだと見えるんですね。これはなにもアメリカが意図してやっていることでもないし、アメリカが悪いわけでもない。ですから、思想的な意味でのユニラテラリズムではなくて、あくまで現象としてのユニラテラリズムです。つまり、文化的な意味でのユニラテラリズムというのは、世界の画一化。世界がだんだん文化的に画一化しているのではないかと、均一化しているのではな

いか。そういうことに対する一種の恐怖とカリアクションが出てきているということです。

このアメリカのユニラテラリズム、単独行動主義に対して、フランスが一番反発していますけれども、イギリスですら反発しています。ヨーロッパがなぜそんなに反発しているのかということを理解するためには、子どもが親に反発するときに、その子どもの性格や子どもの置かれている状況を理解してやらないと、なぜ反発しているのか分からないのと同じように、ヨーロッパ各国の国内政治状況、経済状況を分かっていると理解できない。つまり、ヨーロッパがいま抱えている問題は、一体何かということですけども、私はいまヨーロッパが抱えている大きな問題は3つあると思います。1つは世界化、もう1つはヨーロッパ統合、そして最後が自己の回復という問題でございます。

まず、ヨーロッパでは、かなり多くの人々にとってグローバル化、世界化という現象は、ある人々が疎外されたり、脱落していったり、そういうプロセスです。だから、何となく不安をかき立てるもんだと思われているからです。

実はそういった不安やひずみを直していくことが、大事なことでありヨーロッパでは思われています。しかも、この不安とかひずみを直すというのは、私どもが普通考えているようなことではありません。失業者を救済するとか、企業で定年制をどうするとか、社会福祉をどうするとか、そういう普通日本で考えられているようなことよりも、もっとずっと進んだことであります。

もう1つはヨーロッパ統合という問題です。いま15ヶ国ですけども、今度25ヶ国に大きく増えるわけです。それはどっちに向かって増えるかといいますと、南はアフリカ大陸ですから、南に向かっては増えませんね。西は大西洋ですから、こっちに向かって増えるわけにもいきません。トルコや中近東も入りません。ヨーロッパが広がって数が増えていくといったら、東へ広がるんです。リトアニアとか北にもちょっと増えますが、主として昔の東欧諸国、ソ連邦だった

一部も含めて、東へヨーロッパが移るわけです。ヨーロッパが東へ移りますと、その結果ヨーロッパで何が起るかということ、「あれっ、ヨーロッパって何だったのかな」という自分自身に対する質問が出てきます。

ヨーロッパにおけるアメリカのユニラテラリズムに対する反対というのは、実はヨーロッパが自分自身は何だろうかということ定義しようとする時に、「アメリカじゃないんだよ」と言いたいわけですね。そこに1つのミソがありまして、ヨーロッパ自身がいま、「ヨーロッパとは何なんだろうか」ということを必死に模索している。フランスはフランスで、「フランスって何だろう。フランス人であるということは何なのかしら」と必死に模索している。その時に、自分が何かと言われてもすぐに答えは出ないものですから、「俺はアメリカじゃないんだよ。あいつとは違うんだ」と言いたいものだから、何かアメリカ的なものにはすぐ反発を感じる。そういう面があるということちょっと申し上げておきたいと思います。

実は、以上がすべて前書きみたいなものですが、少し本題の方に入らせていただくと、なぜフランスがイラク紛争でアメリカに「ノー」と言ったかということです。これは1つは、フランスの国内にアラブの人がたくさんいて、約500万人いると言われていて、フランスでいまキリスト教に続く第2の宗教はイスラム教です。したがって、イスラム教徒の問題とかアラブの国々の人の問題というのは、フランス人にとっては非常に身近な問題です。

ヨーロッパから見ると、中近東の世界というのはまさに中近東であって、自分の庭先のような非常に近い存在ですし、つい隣の国ですから、なかなか微妙な問題があるということでもあります。

もう1つ、なぜアメリカのユニラテラリズムにフランスが強く抵抗するかという時に、ちょっと思い出していただきたいのはフランス革命の時にどういう標語があったかということです。つまり、Liberite! Egalite! Fraternite! (自由・平等・博愛) だった。これが問題なんです。

アメリカは、何かというと「自由」なんです。自

由貿易だ、民主社会は自由だ。アメリカは自由の女神の国ですから、自由だ。もちろん自由の女神というのはパリのセーヌ川の上にもあるんですけども、フランス人から見ると「平等」が大事なんです。もちろんアメリカも「平等」と言いますが、アメリカの政治家がイコリティーと言う時は、人種的な意味でイコリティーとか男女のイコリティーということはあっても、それを越えた人類的な大きなコンセプトとして「平等」ということをどこまで言っているのか。アメリカの言っている「平等」とフランスの言っている「平等」は少し意味が違って、例えば、教育を受ける機会均等ということフランスではものすごく重視します。それは、どちらかと言うと、社会正義の実現ということを強く言うものです。

アメリカはどうしても「自由・民主・市場原理」、フランスのほうは「平等・社会正義」を大事にしますから、そこはちょっと考え方が違うと思います。ですから、経済のメカニズムの中で、「小さな政府」という言葉がありますね。「小さな政府」という考え方は、イギリスやアメリカでは流行りますけれども、フランスでは全く流行りません。

さて、ここまでお話しして、最後に本当のことを申し上げたいと思います。本当のことというのは、一番ミソ、落語で言えば落ちですね。落ちですから、いままでのことは、まあ前座ということで聞いていただいているのですが、本当の落ちは何か。なぜヨーロッパはアメリカに反対するのか、アメリカのユニラテラリズムに対して、特にフランスはなぜ強く抵抗するのか。それは実は、アメリカこそが世界の中で責任を果たしているからです。

アメリカはいろいろなところで責任を果たしている。いろいろなことを一生懸命やっている。ヨーロッパは、やろうと思ってもできないんですね。それには様々な理由があって、おカネがないということもあるでしょう。軍事力がないということもあるでしょう。ヨーロッパの中でケンカしていますから、1つにまともでないということもあるでしょう。ヨーロッパは自分はやりたいんです。何とかして世界に貢献したい

し、世界の中でヨーロッパとして一生懸命やりたいのですけれども、アメリカとは太刀打ちできない。

アメリカはやっぱりすごい責任を果たしています。いかにせん、ヨーロッパはアメリカと比べると力が弱い。そこから、彼らの焦り、無力感、そういう一種の気持ちが出てくる、これが問題なのです。いま世界中のアラブの国で反米意識が広がっていますが、これは文明の衝突と云うよりも、アラブの人々の中にもすごい無力感が広がっているせいでもあります。

世界のアンチアメリカニズムの根底にあるのは、ある種の無力感、結局アメリカに頼らざるを得ないという、そういう切なさです。そこをアメリカが理解できるかどうかというところが勝負なのですけれども、残念ながら、いまのアメリカはそこを十分に理解していない。だから反米意識が世界中に広がる。アメリカが一番責任を果たして立派にやっているんだけど、やればやるほど、他の国は無力感を感じるわけで、そこが非常に問題であります。